

市立美術報だより = 特別号 =

発行 鹿児島市立美術館 〒892 鹿児島市城山町4番36号 TEL (0992) 24-3400

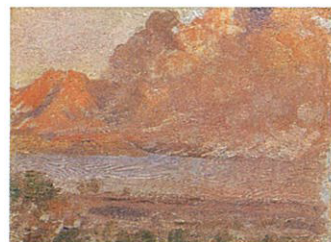
館蔵品誌上ギャラリー②



(噴煙)



(噴火)



(熔岩)



(降灰)



(荒廃)



(湯気)

黒田清輝「桜島爆発図」 1914年 (各14.0×18.0cm)

〈解説文〉 黒田清輝(1866~1924)は、慶応2年に鹿児島市に生まれる。幼年期に黒田清綱の養子となり上京する。18歳の時、法学の就学のためフランスに留学する。やがて画家として目ざめ、ラファエル・コラン(1850~1916)に師事する。帰国後は、白馬会を創設し、生新な外光派の導入に努める。黒田は、日本洋画のアカデミズム確立の第1人者としてその業績はよく知られている。

さて、黒田は、大正3年(1914)、元旦を鎌倉で迎え、1月8日、実父(清兼)の病氣見舞のため、鹿児島に帰郷する。同12日、黒田は歴史的な桜島の大爆発に遭遇する。

この「桜島爆発図」6点は、その時に板に描かれた連作である。「噴煙」の図は、爆発後、3日目の1月15日に制作され、山の中腹から吹き出す赤い熔岩と噴煙がスピードのある筆致で描かれている。この「噴煙」は、6点連作の第1作目になる。1月16日には、黄昏時に噴出する火炎の様子が「噴火」の図として、同18日には鹿児島市街地の高台から遠望した「熔岩」の図、同19日には「降灰」の図として、銀灰色調で火山灰に埋れた庭の樹木が描かれる。そして、同23日、袴腰近くから桜島を望見した「荒廃」の図、最後に、鳴動中に船を出し、海中に達した熔岩を描いた「湯気」の図(月日不詳)がつぎつぎに活写されている。

それぞれに別な日に制作された作品には、画家の激しい心のどよめきと制作意欲をうかがうことができる。又、「噴煙」の図など6点から、感性に恵まれた画家黒田と、光の変化をとらえた外光派の画風がよみとれる。小品ながら、大噴火の状況を知る記録画としても、貴重なものと言える。

黒田は、この作品を、同郷の地震学者、今村明恒に贈った。